



教育文化活動が JAリーダーをつくる (下)

ゲスト/三津山 定 (静岡県JA静岡市 代表理事組合長)

第35回ゲスト

静岡県 JA静岡市 代表理事組合長
三津山 定



みつやま・さだむ

1960年静岡県生まれ。1983年静岡市農業協同組合に入組。静岡市内5農協が1992年合併後、あさはた支店開発次長、長田支店次長、金融業務課長、広報課長、企画部長などを歴任。2020年代表理事専務を経て、2023年に代表理事組合長に就任。静岡県農業協同組合中央会副会長も務める。

●インタビューとまとめ

三重大学名誉教授
京都大学学術情報メディアセンター研究員
石田正昭



いしだ・まさあき

1948年生まれ。東京大学大学院農学系研究科博士課程満期退学。農学博士。専門は地域農業論、協同組合論。元・日本協同組合学会会長。三重大学、龍谷大学の教授を経て、現職。近刊書に『JA女性組織の未来 躍動へのグランドデザイン』『いのち・地域を未来につなぐ これからの協同組合間連携』(ともに編著、家の光協会刊)。

* 前回の記事は[コチラ](#)から

教育文化活動がJAリーダーをつくる

J A静岡市の組合員教育対策事業は、教育基金積立金の運用益を活用して行われている。1支店1協同活動、組合員大学(組合員講座)などで構成されているが、表面上では分からない課題もある。今回は組合員教育対策事業の現状と課題、ならびに改善経過を三津山組合長に語ってもらった。

■ 支店協同活動の成否はアイデア次第

石田：まず1支店1協同活動についてですが、その実施状況はどのようなものでしょうか。

三津山：支店単位で協同活動をしているところ、ブロック単位で協同活動をしているところ、その両方をしているところに分かれます。



たとえば、長田ブロックはブロック協同活動になっていますが、実際は地区の持ち回りでウォークラリーを企画・運営しています。桃の花を鑑賞したり、山に登って駿河湾の景観を楽しんだり、歴史的遺産の宇津ノ谷隧道を訪れたりするなど、各地区の特色を活かしたコースを設定しています。スタンプラリーの形式になっていますので、ポイント、ポイントで女性部がお茶やお汁粉をふるまっていますが、季節によってはミカンやキウイフルーツ(J A静岡市推奨品種『東京ゴールド』)を提供することもありました。

広く募集を掛けていますので、参加者は組合員もいれば一般の地域住民もいて、前回(昨年12月)は宇津ノ谷隧道を訪れるコースだったのですが、350人

を超える参加者がありました。ファミリーの参加が多いので、地域住民から声掛けがあったからでしょう、清水区(旧清水市)や藤枝市、さらには遠く岩手県盛岡市からの参加者もありました。

石田：大成功でしたね。企画次第だと思います。

三津山：ただ、全体的には企画のマンネリ化が進んでいます。支店(ブロック)運営委員会の検討事項をみ



長田ブロック統括部長を兼務する長田支店の岡部支店長(右)と南部総合経済センターの畑澤センター長。「協同活動として年1回実施するウォークラリーが好評を博している」と話す

ると、ルーチン化された議題が多く、今年の農協祭をどうやろうかといった議論に終始しています。本当は女性部や青壮年部からどんどん意見が出て、白熱した議論を交わしてほしいのですが、そこまでのイメージは正直いってありません。

思うに、エネルギーが不足しているのは職員のほうです。いわゆる縦割りのなかで、目標管理というか、数字を追いかける専門職が増えました。数字だけを追いかけて、実績が上がればいいんだろうという格好になりました。横のつながりが崩れてきて、昔でいう農協人としての教育がおろそかになっていることを感じます。

石田：職員教育は資格取得のための専門教育も大切ですが、その前提となる基礎教育もおろそかにできません。それをおろそかにしているところに意欲的なJA職員が生まれてこない原因があると思います。

基礎教育に欠かせないものは何かというと、その一つは協同組合とは何か、農業協同組合とは何かという「アイデンティティ教育」です。もう1つは本当の意味の「歴史教育」です。たとえば、わたしたちの農協は、とてつもない大きな困難に直面したとき、どんな議論をし、どんな決断をしてきたかをケーススタディとして学ぶことが重要です。

三津山：それともう一つ、データの利用の仕方が不得手です。過去のデータを分析し、そこから何がいえるかを導き出すことができていません。

現在「見える化プロジェクト」といって、中央会と一緒に事業利用のクロス分析を行って推進対象先を選定しようとしています。結構面白い結果が出ていますので、それを使ってどんな提案が組合員・利用者にできるかを議論していかなければなりません。

石田：データの分析と利用、これについても基礎教育の一環としてグループ研究を進めていきたいですね。将来のことを考えると、中高年層よりも若年層に期待したい。もちろん男女の区分は不要です。

■ アドリブだからこそ伝わるものが多い

石田：次に組合員大学と呼んでいるようですが、組合員講座についてはどうお感じでしょうか。

三津山：組合員大学(組合員講座)は営農経済部営農課の組合員教育担当(担当者：藤浪一郎)が企画・運営に取り組んでいます。組合員大学の目的は「組合員教育文化活動を通じて、幅広い視野でJA運動をけん



組合員大学の開講式では、カリキュラムに「組合長講話」を入れている

引するリーダーの育成」に置かれており、期間は1年で、講義、視察研修、意見交換、発表会など全8講で構成されています。受講生は支店運営委員会からの推薦とし、2022(令和4)年度の第5期生は23名、そのうち女性2名が学びました。

ただ、女性が少ないことと修了者(5講以上の出席者)が14名と少ないことが気にかかります。

ですが、これまでの経験を活かして内容の充実が図られてきたと思います。具体的には、組合長、専務、常務からJA運営の説明を受けたり、滋賀県立大学名誉教授・(一社)農業開発研修センター会長理事の増田佳昭教授の講演を聞いたり、総代会を聴講して感想文を提出したり、常勤役員との情報交換会を開いて最終講の意見発表につなげています。

石田：外部講師や職員任せの組合員大学もありますが、役員が入れ代わり立ち代わり登場すると、受講生たちの意識も盛り上がります。将来に向かってのつながりも生まれます。

三津山：そのとおりです。昨年度の第3講では組合員大学の修了生も集めて開かれたのですが、20人くらいが集まったのかな、その後にわたしの新任のあいさつと懇親会が計画されていました。円卓になっていましたので、大会議室の講義とは違う雰囲気が出ていました。担当の藤浪から急に「組合長、組合員大学に望むことを話してください」という注文が入って、用意した原稿を使わずに話すことになりました。それがかえってよかったと思います。

石田：アドリブだからこそ伝わるものも多い、ということでしょうね。

三津山：それに味をしめたのか、第7講の「常勤役員との情報交換会」はどんな質問が来るのかまったく分からない、ペーパーレスの情報交換会となりました。受講生から「これは専務に聞きたい」とか、「組合長はどうお考えですか」などと振られるような情報交換会となりました。

そのとき参加していた増田教授はただ黙って聞いているだけ、いっさい口をはさみませんでした。わたしが感じたのは、うまく答えられなくてもいい、「それ分からないな、どうしたらいいと思う？」というように、逆の問いかけもアリかなと思いました。

そのほうが面白いですし、形式張って、これはこうで、こうなっていますよと



昨年度の組合員大学の閉校式。多様な人材育成につながっている

答えるのは、参加者からすれば、期待するものとは違っているのかもしれませんが。

石田：わたしも経験がありますが、担当職員と外部講師だけが登場し、受講生にとってどれだけ自分たちが期待されているか分からないような組合員大学では、成果に差が出てくるように思います。

■「じまんの農業塾」ただいま開講中

石田：准組合員を対象に行われている「じまんの農業塾」についてはどうお考えでしょうか。

三津山：「じまんの農業塾」は、おっしゃるとおり准組合員を対象に、JA直売所「じまん市」(5か所)への出荷者を増やすための取り組みとして始まりました。静岡市の人口は67万人、そのうち管内人口は45万人で、その規模にふさわしい「じまん市」を維持するには農業生産の拡大が欠かせません。

静岡市は行政面積こそ広いものの、その多くは山林で、農地とりわけ平坦な農地が少ないだけでなく、平坦地には宅地が広がっています。主力の静岡本山茶も苦境が続いており、JAの農産物販売額は2011(平成23)年の52.9億円から2021(令和3)年の40.1億円へ12.8億円減少しています。とくに茶は15.1億円から5.9億円へ9.2億円減少しています。

そうしたなかで生産が伸びているのがワサビ、葉しょうが、花卉(花木等)などで、これらの生産振興を図るとともに、現状では生産者は少ないのですが、自慢の地域特産物をつくりたいと思って、独特の粘りとシャキシャキ感のある麻機地区の「あさはた蓮根」、とろろ汁で有名な東海道五十三次・丸子宿の「丁子屋」等で提供される藁科地区の「ほんやま自然薯」、それに枝物などの普及拡大を図っています。

ご質問の「じまんの農業塾」についてですが、2021(令和3)年度からスタートしました。1期生は研修期間が2年(月1回)でしたが、2期生以降は1年(月2回)にカリキュラムを変更し、現在は3期目を実施中です。4月から翌年3月ま



農業塾で学び、直売所「じまん市」の出荷者になる人もいる

での1年間、講義と実習指導を受けます。受講生はおよそ10名で、栽培品目はナス、エダマメ、トウモロコシ、キャベツなどです。

1期生で出荷者第1号となった海野綾子さんは、「出荷した時、すぐにお客さまが野菜を手にとってくれたり、飲食店から自分の作ったネギが欲しいと申し出があったときは、自信につながりました」と言っています。同じく1期生の佐藤弘子さんは「仕事をしながら農業をやろうと決めてイチジク栽培に取り組んでいます。来年以降の出荷をめざしています」と話しています。

カリキュラムは、1人約12㎡の区画が与えられ、春夏野菜、秋冬野菜の定植・栽培管理から収穫、そしてじまん市での販売までの実習と、先輩農家の圃場見学、税務・生産履歴シートの記帳指導のほか、最終理解度テストなども行っています。受講料は年間4万円(税込)ですが、設備や農機具はJ Aが準備しています。

担当部署は募集や管理を行う企画部のほか、実際の技術指導は営農経済部営農課の「じまんの農業塾」担当(担当者：堀川晃宏)が行い、荒廃農地をJ Aが借りて整備した「あさはた第1圃場」(静岡市葵区北1丁目)を使用しています。さらにじまん市を管轄する直販課も加わり、一部署だけでない横断的な連携により運営を行っています。

これまでの経験から、准組合員でその意欲があれば誰でもいいというだけでは出荷者の誕生にはつながらないことが分かってきましたので、現在は准組合員に限らず正組合員及びその家族までを対象とし、受講生の募集を行っています。

石田：わたしも現地を拝見しましたが、ハウス内で簡単な座学が行えるようになっているほか、圃場には灌水施設が整い、機械装備も充実していました。担当する職員も大変意欲的で、受講生たちとLINEで頻繁に情報交換しているとのことでした。



農業塾の講師は営農課の堀川主任。ビニールハウスで座学も行う。隣接する畑に受講生の試験圃場がある

(取材／2024年4月25日)

動き出した「静岡外茶計画」

「お茶を持って出かけよう」をキャッチフレーズに、「静岡外茶計画」が2022(令和4)年8月1日から動き出した。外茶(そとちゃ)はJA静岡市が提案している新習慣で、静岡本山茶を家の外でも楽しんでもらおうという企画である。



若い世代にも手軽にお茶を飲んでもらい、お茶を携帯する習慣をすすめている

販売商品としては、飲む場所や時間をイメージして仕上げた「SOTO」「ASA」「KOKOZO」の3種類を、普段お茶を飲まない方にも手軽に使ってもらえるティーパックで用意した。「SOTO(外)」は、マイボトルにティーパックごと入れて持ち運ぶことを想定し、水出しでも色や風味がしっかり感じられ、「ASA(朝)」は爽やかな香りとすっきりとした風味に特徴があり、「KOKOZO(ここぞ)」はここぞ!という時に最適なJA静岡市史上「最濃」のお茶という触れ込みである。

JA静岡市としても、静岡本山茶をリーフのまま楽しんでもらいたいと、各購買店・各じまん市、オンラインショップ「JA静岡市ブランドショップじまん館」(JAタウン内)などで販売している。わたしはリーフ茶を水出しで飲むのを習慣としているので、いただいた静岡外茶を大切に味わっている。

こうした取り組みを地元選出の上川陽子衆議院議員も応援しているが、上川議員は静岡県茶業会議所の会頭、日本茶業中央会の会長を務めている。

苦境が続く茶業界ではあるが、令和5年度全国茶品評会で静岡本山茶が最高位の農林水産大臣賞を獲得したという明るいニュースもある。